

平成27年度事業報告書

学校法人 桐蔭学園

第1 法人の概要

1 建学の理念と教育目標

桐蔭学園は、昭和39年(1964年)、東京オリンピックの年に、公教育の枠内ではできないことを実践する私立ならではの教育を目指して創立されました。その建学の精神(理念)として、「できないものはできるようにし、できるものをさらに伸ばす」という基本に基づいて、以下の4項目を掲げました。

- 社会連帯を基調とした、義務を実行する自由人たれ
- 学問に徹し、求学の精神の持ち主たれ
- 道義の精神を高揚し、誇り高き人格者たれ
- 国を愛し、民族を愛する国民たれ

更に、平成26年(2014年)、創立50周年を機に、社会がますますグローバル化に向かう中で、日本のみならず国際的な平和、あるいは地球規模の自然環境など、世界的な課題を視野に置いた教育を考え、5つ目として、

- 自然を愛し、平和を愛する国際人たれ

という項目を追加しました。

この建学の精神の元となっている教育方針は、「私立学校でなくては果たせない独自の校風を確立し、我々の理想とする教育を徹底的に行うことにより、道徳的、知的、社会的に調和の取れた高い人格を育成し、将来いかなる分野に進んでも、各分野の指導者として、その役割を十分に果たして、社会、国家、人類の福祉のために貢献することができる人材を育成することを目標とする」ことであり、今なお、この方針は、設立時から引き継がれています。

今後、グローバル化がますます進み、地球環境の悪化が予測され、少子高齢化が進行する中、次世代を担う若者に求められているものは、グローバル化が進む世界に向かって、臆することなく羽ばたいていける「たくましさ」と、その一方で、異なる文化への寛容性を持って地球規模の課題の解決に貢献できる「しなやかさ」であると考えます。

こうした中、人類の未来のために何ができるのかという視点で考え行動するためには、「自ら考え判断し、行動できる子供たち」の育成、すなわち、一人ひとりが変化の激しい多様な社会にしっかりと対応し、地に足を付け、自らの人生を切り拓いていけるための自律的学習能力を育てることが大切です。

これらを目指して、桐蔭学園では、「学力・知性」「行動力・社会性」「創造力・感性」の育成という三つの柱を軸として、教職員が連携協力して日々の指導を展開しています。

その具体的なアクションとして、アジェンダ8を策定し、平成27年(2015年)4月から、アクティブラーニング型授業の導入をはじめとする様々な取り組みを開始しています。

2 桐蔭学園の沿革

年 号	月	事 項
昭和 3 9 (1964)年	4	学校法人桐蔭学園設立、桐蔭学園高等学校開設
4 0 (1965)年	4	桐蔭学園工業高等専門学校開設
4 1 (1966)年	4	桐蔭学園中学校開設
4 2 (1967)年	4	桐蔭学園小学部開設
4 4 (1969)年	4	桐蔭学園幼稚部開設
4 6 (1971)年	4	桐蔭学園高等学校理数科開設
5 6 (1981)年	4	桐蔭学園高等学校・中学校女子部開設
6 3 (1988)年	4	桐蔭横浜大学開設(工学部)、技術開発センター開設
6 3 (1988)年	8	本部管理棟、鶴川メモリアルホール(現 桐蔭学園シンフォニーホール)竣工
平成 3 (1991)年	11	桐蔭学園工業高等専門学校廃止
4 (1992)年	4	財団法人ドイツ桐蔭学園開設、大学院工学研究科修士課程開設
5 (1993)年	4	桐蔭横浜大学法学部開設
6 (1994)年	4	大学院工学研究科博士後期課程開設、大学情報センター竣工
9 (1997)年	4	大学院法学研究科修士課程開設
1 1 (1999)年	3	総合体育館竣工
1 1 (1999)年	4	桐蔭生涯学習センター開設、先端医用工学センター開設
1 3 (2001)年	4	桐蔭学園中等教育学校開設
1 3 (2001)年	5	メモリアルアカデミウム(現 桐蔭学園アカデミウム)竣工
1 6 (2004)年	4	桐蔭横浜大学法科大学院開設、交流会館竣工
1 7 (2005)年	4	桐蔭横浜大学医用工学部開設
2 0 (2008)年	4	桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部開設
2 1 (2009)年	4	桐蔭横浜大学医用工学部改組、生命医工学科開設
2 2 (2010)年	3	桐蔭横浜大学中央棟竣工
2 4 (2012)年	3	財団法人ドイツ桐蔭学園閉鎖
2 6 (2014)年	3	桐蔭横浜大学医用工学部新実習棟竣工
2 6 (2014)年	4	桐蔭横浜大学工学部廃止
2 7 (2015)年	4	桐蔭横浜大学スポーツ科学研究科開設
2 8 (2016)年	2	桐蔭横浜大学体育館竣工
2 8 (2016)年	3	桐蔭横浜大学工学研究科情報・機械工学専攻廃止

3 設置する学校・学部・学科、入学定員・学生数(生徒、児童、園児数)の状況等

(1) 桐蔭横浜大学(昭和 6 3 年度開設)

ア 大学院

法学研究科	(入学定員 1 2 名 : 現員 1 6 名)
工学研究科	(入学定員 2 0 名 : 現員 2 7 名)
スポーツ科学研究科	(入学定員 1 0 名 : 現員 6 名)
法務研究科	(入学定員 3 0 名 : 現員 4 7 名)

- イ 法学部
 法律学科 (入学定員180名：現員679名)
- ウ 医用工学部
 生命医工学科 (入学定員 40名：現員174名)
 臨床工学科 (入学定員 40名：現員172名)
- エ スポーツ健康政策学部
 スポーツ教育学科 (入学定員 80名：現員392名)
 スポーツテクノロジー学科 (入学定員 80名：現員383名)
 スポーツ健康政策学科 (入学定員 80名：現員377名)

(2) 桐蔭学園高等学校 (昭和39年度開設)

全日制課程

- 普通科 (入学定員1,150名：現員2,037名)
 理数科 (入学定員 270名：現員 722名)

(3) 桐蔭学園中学校 (昭和41年度開設)

(入学定員 550名：現員1,070名)

(4) 桐蔭学園小学部 (昭和42年度開設)

(入学定員 160名：現員 861名)

(5) 桐蔭学園幼稚部 (昭和44年度開設)

(入学定員 70名：現員 74名)

(6) 桐蔭学園中等教育学校 (平成13年度開設)

- 前期課程 (入学定員 160名：現員 479名)
 後期課程 (入学定員 160名：現員 496名)

全日制課程

注：上記の学部、学科及び現員学生数(生徒、児童、園児数)は、平成28年3月31日現在のものである。

4 役員・教職員の状況

(1) 役員(平成28年3月31日現在)

理事長		平岩 敬一	
理事	小島 武司	理事	野坂 康夫
理事	萩原 啓実	理事	園山 和夫
理事	蒲 俊郎	理事	長野 充
理事	佐藤 宣践	理事	澤本 敦
理事	田中 實	理事	内藤 聰
理事	平岩 敬一	理事	上辻 孝雄
理事	江口 英彦	理事	吉田 勝明
理事	竹中 徹	監事	鈴木 松太郎
監事	南 増明	—	—

定数：理事12人以上15人以内、監事2人以上3人以内、任期は共に2年

(2) 平成28年3月31日現在の教職員数は、教員493名、職員170名

第2 事業の概要

平成27年度中の主要事業の概要は以下のとおり。

1 学園

(1) 「アジェンダ8」の推進

今日の少子高齢化、急速なグローバル化の進展、ICT機器をはじめとする情報技術革新など社会の状況が複雑多様化する中で、これに対応すべく我が国の学校教育が大きく変わろうとしている。このような大きな流れの中、本校の新たな50年を見据え、アクティブラーニング型授業の導入をはじめ、キャリア教育、ICT教育の充実など8項目を平成27年度から改革の行動指針とする「アジェンダ8」を策定して教職員一体となってその推進に取り組んだ。具体的には、①アクティブラーニング型授業の導入、②キャリア教育の充実、③個別学習支援システムの開始、④ICT教育の充実、⑤サイエンス教育の充実、⑥グローバル教育の充実、⑦芸術・文化教育の充実、⑧保護者の皆様との連携の8項目である。

(2) 組織の立ち上げ

本校の英語教育を更に充実させ、英検取得率の向上に取り組むとともに、語学研修をはじめとする様々なグローバルプログラムを実践していくために、新たな組織としてグローバル教育センターを設置した。

(3) 桐蔭英語村の活動

開設2年目となった英語村は、小学部3年生のキッズクラブに申込が殺到したため、前期は抽選となった。後期は前期の抽選落選者約30名にも参加してもらえるように2クラス増設し、全14クラスの体制で実施した。また、中学・高校・中等前後期の各学年で海外語学研修プログラムが拡充されたことを受け、男子中学3年のシンガポール研修、高校1年のセブ島研修、女子中学のカナダ研修の参加者に対しても、事前学習（各6回）を実施した。これは時間の限られた海外での語学研修をより実り多いものにするための企画で、飛行場での会話やホームステイ先での会話練習が好評であった。年3回の大きなイベント（春の祭典、ハロウィン、クリスマス）には中高生も放課後参加可とするとともに、高校生の平日自由利用（事前届け出制、1日3名まで）制度も開始し、中高生が少しでも多く利用できるように便宜を図った。

(4) スポーツ科学研究科の開設

学部で目指しているスポーツ健康政策学の理論構築をするため、その基盤学問であるスポーツ科学の高度な専門知識・技能を学び、社会の発展に貢献できる人材を育成するため、スポーツ科学研究科を開設した。

(5) スポーツ教育振興本部の活動

各委員会（本部運営委員会、財務広報委員会、スポーツ施設委員会、スポーツ危機管理委員会、スポーツ強化クラブ委員会）に加え、平成26年4月に開設した、桐蔭学園すべてのスポーツ活動を支援するスポーツサポートセンターでは、メディカル、トレーニング、心理サポート、栄養サポート、科学的サポート、メディアサポートの部門別に講習会等を開催するなど、積極的な活動を展開した。

(6) 創立50周年記念事業

桐蔭学園創立50周年記念事業の一環として、平成28年2月、利便性の向上はもとより、耐震性や熱中症対策、省エネなど安全面や環境面にも配慮した桐蔭横浜大学体育館が竣工し、平成28年度から運用開始の運びとなった。

(7) 校舎施設の整備

平成27年度の校舎施設・設備等の整備事業としては、女子部体育館アリーナ天井照明LED改修、中学棟2階武道場畳更新、中学体育館ステージ照明LED改修、サッカークラブハウス空調機更新工事等を行った。設備以外の改修工事では、高校食堂地下ピット清掃、女子部体育館屋上防水・屋上トップライト改修・アリーナ天井撤去・地下2階プール天井ルーバー撤去、大学法学部棟青・黄色階段室外壁シーリング、サッカークラブハウス内装・屋上防水改修工事等を行った。

2 大学・大学院

(1) 入試について

・ 大学全体として、入学志願者数を毎年増加させてきていたが、前年度2,222名に対して2,064人と、27年度は、微減となった。学部ごとでは、法学部が前年より伸び、スポーツ健康政策学部は、ほぼ横ばい、医用工学部の受験生の減少が大きかった。医用工学部は昨年度大きく伸びたが、その分ほぼ減少し、一昨年と変わらない状態に戻った。

入学者数は、医用工学部生命学科で定員を1名割ったが、全体としては前年並みを確保できた。高校訪問を、指定校推薦の増加に結び付けることができた点は成功であると評価できる。オープンキャンパスの参加者の大きな割合が、受験し入学する特徴は維持できたが、参加者数を増やす努力が必要である。

・ 研究科については、法学研究科、スポーツ科学研究科ともに、定員10名に対して4名入学と定員割れである。前年度と比較しても減少であり、何らかの対策が必要である。他方、工学研究科は、定員14名に対して17名が入学し前年度を大きく上回った。これは成功と評価でき、継続性が求められる。

(2) 教育について

・ 教学マネジメント会議を創設し、学長を中心に、全学的な方針を常に検討し直しながら、改善点を修正していく体制が構築された。

・ 学生数あたりの教員数が全国で抜きんで多い利点を生かし、教員が個々の学生と密に接触し丁寧に指導する方針を維持した。

・ 教職課程では、平成27年度に小学校免許、中高保健体育科免許、中学社会科免許、高校公民科免許を合わせて延べ123件の教育職員免許状を得て卒業した。また平成27年度までの学部卒業生で、平成27年度に各自治体の教員採用において22名の学生が正規採用に至った。

・ 法学部は、刑法学者を一名補強し、専門教育を充実させるとともに、体育系強化部活に励む学生のための教育に工夫を凝らした。また、昨年度に引き続き、退学者率を低下させた。

・ 臨床検査技師と臨床工学技士の試験合格率が新卒で86.7%と59.3%であった。

・ スポーツ健康政策学部は、新カリキュラムによる教育内容のより一層の充実を

図るとともに、サービ斯拉ーニングや実習科目などの特徴ある授業の充実にも努めた。これらは、志願者、入学者増にも繋がっている。

- ・ 学習支援について、法学部では多くの学生が推薦入試、AO入試で入学している。そのため、これまで受験勉強をしたことがないという学生も少なからず存在する。そうした学生は試験に向けてどのように勉強を組み立てて行くのかが理解出来ず、計画もなく、手にしたテキストをただ手にして勉強した積もりになっている場合もある。また、法学部は文科系であるため、数学関連に苦手意識を持つ学生が多い。その一方で、文章表現については、主語と述語の関係が意識されていないなどの場合も見受けられる。こうした学生については、個別的な指導が有効であり、ピアツツァ M では、これを行ってきた。その結果、警察、消防への合格、行政書士試験合格などの成果が出ている。現在では、指導人数が少ないこともあって、まだその数は大きくはないが、従来の指導を数的に拡大することで一層の成果増大を図る計画である。
- ・ 医用工学部中心の学習支援インディ・カフェは、数学・物理・生物の講座とともに、国家試験対策（臨床検査・臨床工学）ME 試験対策講座を開いている。開室時間は10時から18時まで、年間162日開室し、利用者数は、延べ5,006人であった。指導を受けた学生4名が公務員試験に合格した。
- ・ スポーツ健康政策学部の学習支援CPACは、年間通して開講しているが、前期77名、後期50名、年間95名が参加した。公務員試験受験者9名のうち5名がCPACを利用し、そのうち4名が合格した。後期になって利用者数は減少したが、1人当たりの参加回数は増加した。学力不足の政策学科の利用者が多い。今後の課題として、長期にわたって継続的に利用する学生が少ないこと、教員採用試験に向けて利用する学生が少ないことが上げられる。

(3) 就職支援について

- ・ 全学部生を対象とする就職支援業務、個別相談・カウンセリング業務のほか、各学部特性に応じた就職支援業務を実施した。全学部生を対象とした主な事業としては、学内合同企業説明会（4月、5月）、個別企業説明会（全期間）、インターンシップガイダンス（5月）、3年生対象SPI模試および解説講座（6月、7月、10月）、官公庁および横浜商工会議所インターンシップ参加支援および先方との連絡調整（7、8月）、ナビサイト登録案内（全期間）、業界研究セミナーおよび病院見学会（11月、12月、2月）、就職活動用写真説明会（1～3月）、女子学生対象就職活動メイクアップ講座（1月）、警察官採用試験説明会（複数回）、就職活動スタートアップミーティング（2月）、進路状況調査（3月）を実施した。なお、企業向け求人依頼パンフレットを作成し、東京都・神奈川県内の企業約2,500社に送付した。
- ・ 各学部単位の支援施策として、キャリア講座の運営（各学部）、ボランティア活動促進、ビジネスマナー講座（法学部）、施設見学ツアー、病院接遇マナー講座、病院説明会、医療関係講演（医用工学部）を実施した。キャリア情報センターのカウンセリング業務は、志望業界ないし応募企業決定の相談やES、履歴書の添削指導、面接練習等の比較的長時間の指導を要する指導および技術的指導（医用

工学部学生については医療系アドバイザーによる支援)において、大きな役割を果たしている。なお、スポーツ健康政策学部を担当するカウンセリング事業者が当年度をもって事業から撤退したことから、新事業者の選定と引継ぎを行った。当年度は企業の求人意欲が堅調なこともあり、就職率が全学的に向上した。各学部とキャリア情報センターは全学就職委員会における十分な情報共有の下で連携を図っており、各学部による指導と、キャリア情報センターによる支援業務が効率的に機能したものとする。

(4) 法科大学院

・ほとんどの法科大学院が、入学者の確保に苦しむ中、本学は、入学数の減少を最小限に抑えた。それでも、定員の半数確保が達成できていない。合格者数は8名と昨年比倍増となり、目標の10名に届かないものかなり健闘した。合格者数では全国30番位の順位になっている。財務については、人件費を中心に大幅な経費節減を実現したが、依然として大きな赤字を出している。有名な実務家を呼び、コンプライアンス教育を充実させるプロジェクトが、外部から高い評価を受けている。

(5) グローバル化対応

・英語村は、開設2年目は初年度の成功点・失敗点を踏まえ、本学の学生に適した活動形態を模索した。イベントはSpring Festival、燦爛祭、ハロウィーン、クリスマスを4本柱とし、日常の活動を「気軽な楽しいアクティビティー」と「ミニレッスン」に分割した。英語村の専有スペースが増えたので、ラウンジではアクティビティー(ゲーム、料理、映画鑑賞、カラオケ等)を実施し、レッスン室ではTOEIC・TOEIC Bridge対策、英検対策、基礎英会話講座、教員採用試験対策、医用工学部生用講座など、多様なミニレッスンを提供した。Listening/Speaking部分はネイティブスタッフ、文法/読解部分は日本人スタッフが担当するミニレッスンは、学生にも非常に好評であった。また、ドミニカン大学(米国)に加え、新しく追加されたボンド大学(豪)への短期語学留学生に対して、事前学習を実施した。水泳部・女子バレー部への英会話指導、次々に来日する柔道研修生と日本人学生の交流にも力を注いだ。このような改革の結果、大学生の利用者は平成26年度より増加し、一般の延べ利用者は3,119名(平成26年度2,407名)、ミニレッスン受講者544名(40名)、短期留学者事前学習359名(220名)であった。をさらに発展させ、高校以下だけでなく、大学生の利用者数も伸ばしている。

・西南政法大学、南京師範大学から交換留学生6名が来て、法学部学生1名が南京師範大学に留学した。

・アメリカ・ドミニカン大学短期語学留学に3学部から23名が参加し、成果報告会を開催した。

・豪州ボンド大学短期語学留学(スポーツ健康政策学部は国際コミュニケーション実習)に2学部から18名が参加し、成果報告会を開催した。

・両方の大学の学士が取れるコースに南京師範大学から、三年次編入で1名入学した。

- ・ 医用工学部では第 10 回桐蔭医用工学国際シンポジウムを 1 1 月に開催し盛況のうちに終了した。

(6) 研究について

- ・ 平成 2 7 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）には 2 2 名が応募し 8 件採択された。この他、他機関からの移籍者による新規採択 1 件、継続 1 2 件、若手研究者を対象として特別研究員奨励費に新規 1 件、継続 1 件、合計 2 3 件の研究が行われた。
- ・ その他、文部科学省の戦略的創造研究推進事業 A L C A（継続）、笹川スポーツ研究助成（新規採択）、国立研究開発法人日本医療研究開発機構の難治性疾患実用化研究事業（研究分担者）、豊橋市イノベーション創出等支援事業（新規採択）に採択され、研究が進められた。また、企業との共同研究、受託研究、奨学寄付、技術指導契約（新規 9 件、継続 2 件）等も行われた。
- ・ 特許関係では、宮坂力教授等による発明で、桐蔭学園が有する特許のうち、5 つの特許の専用実施権設定の対価として 1, 0 8 0 万円が桐蔭学園に支払われた。

(7) スポーツ活動について

- ・ スポーツ教育振興本部が中心となり、6 強化部のサポートを実施した。
- ・ 野球部は、秋季神奈川リーグ優勝、サッカー部は、関東一部リーグに 4 期続けて残留を果たした。
- ・ ハンドボール部女子は、関東リーグにおいてこれまでで最高の 4 位の成績を上げた。

(8) キャンパスライフの充実

- ・ 学生部が中心となり、中庭の活用などキャンパスライフの充実を図った。
- ・ 学園祭の活性化を更に図り、参加人数を増加させる成果を上げた。
- ・ 英語村と連動し、ハロウィンパーティー、クリスマスのイベントを開催した。
- ・ 文化教育推進本部を開設し文化部の活動活性化を目指すことが決定された。

(9) 地域貢献・社会貢献

- ・ 桐蔭生涯学習講座において年間 91 講座を実施した。受講生延べ 1, 0 7 9 名であった。
- ・ 神奈川県との連携事業として、「大学で学ぼう～生涯学習フェア～」(参加者約 2 0 0 名)、「横浜ランドマーク・スカイクライミング」(参加者 1, 2 5 0 名)、「中高生のためのサイエンスフェア」(参加者約 2, 4 5 0 名／本学の実験・体験コーナー「カラダを治す(指導：医用工学部・石河講師)」には 3 0 0 名が参加した。この他、「中高生キャリアプログラム」(1 4 名参加)、「子ども科学探検隊」(小学生高学年 3 5 名を含む 7 4 名参加)などを実施した。
- ・ 横浜市との連携事業として「ヨコハマ大学まつり」(参加者約 1 5, 0 0 0 名)を実施、本学は米坂教授(医用工学部)のキャリア講座(2 0 名受講)、音楽部やダンスサークルの学生によるステージパフォーマンスを展開した。
- ・ 青葉区との連携事業として、地域課題解決型貢献活動として、「ファミリーウオーキング」(約 9 0 名)、「さくらミステリーウオーク」(約 7 0 名)を実施した。この他、「リレー講座」、区内 6 大学の学生が中心となって「アオロクまつり」な

どを実施した。

- ・ 高齢者転倒防止教室（25名参加／すすき野消防署・緑の郷との共催、指導：スポーツ科学研究科 桜井教授）も実施した。
- ・ 平成28年3月「都市緑化及び健康増進に関する桐蔭横浜大学と青葉区役所との連携に関する覚書」を取り交わした。
- ・ 夏の大学恒例イベントとして、「第17回おもしろ理科教室」を実施したところ、来場者約1,600名であった。

(10) 高大連携

- ・ 医用工学部では桐蔭高校理数科2年生（約220名）を対象に「課題研究」の実習・実験の授業を大学で行った。また、桐蔭中等教育学校の生徒にキャリアの授業を行った。

(11) 設備

- ・ 総合体育館が竣工した。
- ・ サッカーグラウンドの用地買収を終え、28年度には完成予定である。
- ・ 大学のクラブハウス建設も着工し、28年度初めに完成予定である。
- ・ 野球部の練習場についても準備を進めた。

3 高校以下

高校以下の教育については、一貫教育準備チームを中心に取り組んできた「考える授業」「新しい授業」「次世代型授業」を、中教審の答申に合わせて「アクティブラーニング」の呼称に統一し、27年度から本格的に導入していった。まずは、①「中学校・中等教育学校の新入学年」と、②「高等学校の新入学年及び中等教育学校4年生」を、アクティブラーニングの実践推進学年と位置付けた。単なる表面的・形式的導入に終わらぬよう、アクティブラーニング研究の第一人者である京都大学の溝上慎一教授を本校の教育顧問として招聘し、そのプロデュースの下で年度開始前の研修期間から推進委員たちで合宿を行い、直接的指導を仰ぎながら順次段階的導入を図っていった。その後の授業実践や研修を繰り返していく中で、溝上教授からは、推進委員たちの取り組みに対して、予想をはるかに上回るレベルにまで達しているとの称賛のお言葉をいただいた。「実践モデル校」として本校の取り組みを発信すべく、12月には「公開研究会」を開催し、全国から多くの教育関係者が来校した。

個別学習支援システムの開始については、27年度中学校・中等教育学校の新入学年から、一人一人の学力に応じたきめ細やかな学習指導を本格的に開始した。生徒全員にタブレット端末（iPad）を持たせ、「eトレ」という学習アプリを利用することで、「PDCA」のサイクルに合わせて学習計画を立て、学習方法を学び、それに沿って学習を進め（eタイム）、進捗状況・定着度を確認（eチェック）し、チューター制度により課題を明らかにして、学習計画を見直し、再度チャレンジする（eフォロー）という方式で進めていった。また、「ロイロノート」というアプリによって、各生徒の学習時間の記録や考查結果等を蓄積できるようになっただけでなく、生徒と教員のコミュニケーションも一層よくとれるようになった。

教員研修では、「アクティブラーニング型授業」の本格的実践に向けて、推進委員を中心に、研究授業や公開授業を行い、教科・科目の枠を越えて積極的な研修を行っ

た。一般教員に対しても、各種講演会や「公開研究会」での内部研修をはじめとする様々な研修の機会を設けた。自分自身の授業でどのような形で「アクティブラーニング」を取り入れて行くかを、長期研修期間における報告書にまとめさせた。

I C T教育の推進では、電子黒板（スマートボード・機能付きプロジェクター）を新中学・中等1年全教室へ導入し、新入生全員に持たせたタブレット使用と併せて、これらを授業で積極的に活用していった。更に、28年度への継続のために、中学・中等2年、高校1～2年、中等4～5年の全教室にプロジェクターとスクリーンを年度末までに整備することができた。教員によって差のあるI C Tリテラシーについては、各教科・個人での研修を重ねることで、組織的な教育の実践に努めていった。

グローバル教育では、27年度に「グローバル教育センター」を立ち上げ、国際交流部門との統合を図った。本校の英語教育を更に充実させ、英検取得率の向上に取り組むとともに、語学研修をはじめとする様々なグローバルプログラムを実践していった。模擬国連部をその代表的な活動に位置付けていったが、5月にニューヨーク国連本部で開催された世界大会で見事準優勝に輝いた。

サイエンス教育についても、中学段階から各種実験講座を企画し、増加傾向にある「理科離れ」から「理科好き」を増やす方向への転換を図っていった。キャンパス内での生物観察や、力学に関連したブーメランや風船ロケットの制作企画等を、中等・中学1年生を対象に行った。また、8月に中学・中等1～3年生を対象として実施した「やさしい科学技術セミナーin 東京大学」では、講演や体験学習を通して、サイエンスについての新たな発見を体感した。高校段階・中等後期段階の「課題研究」「グループ研究」も、プレゼンテーション、論文作成に至るまできめ細かな指導でやり遂げることができた。

キャリア教育では、一人一人の生徒の人生におけるそれぞれの過程で、自分に合った充実した生き方が自律してできるように、必要な教養や態度、能力を育てるため、社会の第一線で活躍する本校の卒業生や保護者等による講演、ガイダンス等を実施した。また、研修旅行、学園祭、合同運動会等の校内各種行事においてP B L（Project Based Learning：課題解決型学習）の実践の場ととらえ、運営をより一層生徒主体のものとして実施した。

芸術・文化教育では、本格的な舞台装置を備えた桐蔭学園シンフォニーホールや各種の企画展示を行う桐蔭学園アカデミウムにおいて、一流の芸術・文化に親しむことで、生徒たちの豊かな感性・教養を育んだ。また、生徒の創作活動の発表の場や、企画展示を鑑賞する機会を多く設けた。

保護者の皆様との連携では、生徒がよりよい学校生活を送れるよう、保護者と学校が緊密に連携し、共に生徒を見守り育てていく関係づくりに取り組んだ。具体的には、これまでの三者面談、家庭訪問、クラス懇談会などに加え、全学校の生徒、保護者を対象としたカウンセリング窓口や相談窓口の設置のほか、学校医による保護者向け講演会を開催した。

このほか、各学校における取り組みについては、次のとおり。

(1) 高等学校男子部

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・ 12月に本校を会場に開催された「桐蔭学園AL公開研究会」は、全国から意欲的な教育研究者を集めて大きな成果を収め、それも大きなきっかけとなり、授業の進め方に変化が生じつつある。
- ・ 1年（52期生）が最初のAL推進学年となり、推進委員は週1回のペースで検討会議を実施し、相互に授業参観も実施したが、全体への情報発信が十分でないことから、今後、授業の中でALというものをどう織り込み、その方法をどう拡散・浸透させていくかが課題である。
- ・ 2・3年においては、各自の授業の中で試行錯誤を開始し、様々に模索しつつ次の年度に繋いでおり、現行システムの見直しや、現行システムの中でALをどう活かしていくかも思案される場所である。

② キャリア教育の充実

- ・ 1年では「適性検査」を実施した。2年対象の「がんばれ！！桐蔭学園！！」も4年目を迎えすっかり定着し、芸能・スポーツ分野で著名な卒業生にディスカッションしてもらい、2年に相応しい動機付けができた。一方、3年対象の「フロンティアセミナー」では、幅広く各界の第一線で活躍している卒業生・保護者・桐蔭横浜大学教員他の経験に基づいた貴重なアドバイスや最先端の話題を聴くことができ、大学受験を目前にした3年にとっては有意義な時間となった。

③ 個別学習支援システムの開始(高校男子部は対象外)

④ ICT教育の充実

- ・ 1年（52期）・2年（51期）の全教室にプロジェクターとスクリーンの配備を完了した。次年度の意欲的な利用が期待される。

⑤ サイエンス教育の充実

- ・ 2年理数科対象の「課題研究」が代表的な企画である。当初からの文科系の課題も対応するあり方から脱し、理数系の課題に限定して継続し、高校の教員に止まらず、桐蔭横浜大学の教員の指導も受け、しっかりした成果を上げた。

⑥ グローバル教育の充実

- ・ 基本的には「留学システム」（長期・短期）で対応した。1年（52期）は「セブ島語学研修」（任意）を2週間（3/20～4/3）した。英語によるマンツーマン授業等で英語力を向上させ、国際交流も果たせた。
- ・ 全校を挙げて英検の受検を勧め、学年によっては対策講座を設けて対応した。また、各学年で英単語集の共通テストも実施し、英語力の向上も図った。

⑦ 芸術・文化教育の充実

- ・ 学年全員が参加する企画、選択制の企画、任意参加の企画など方法は様々であるが、シンフォニーホールやアカデミウムを意欲的かつ十分に使いこなし、豊かな感性を育んだ。

⑧ 保護者の皆様との連携

- ・ 全体の父母会（年2回）、クラス懇談会（任意）を実施した。学年別では、1年では家庭訪問・学校面談を、2年では3年の受験期突入を前に進路面談（生

徒・保護者・担任)をそれぞれ実施した。

- ・ 恒例の父母会主催のバザーもあり、保護者との緊密な連携を図った。
- ・ 1年(52期)では頻繁に学年通信を発行(保護者にメールで配信)、保護者の理解を得ること多とした。

イ 進学実績

【理数科】

- (ア) 東大 2名(在籍比0.8%)
- (イ) 難関大 39名(在籍比16.0%)
- (ウ) 国公立大+早慶+ICU 61名(在籍比25.0%)
- (エ) GMARCH以上 112名(在籍比45.9%)

【普通科】

- (ア) GMARCH以上 107名(在籍比28.3%)

ウ その他

ラグビー部が全国高等学校ラグビーフットボール大会で準優勝したほか、囲碁部が全国囲碁選抜大会で団体優勝した。柔道部は、全日本カデ選手権大会、ポーランドカデ国際大会において66kg級の石郷岡秀征(高校2年)が優勝した。

(2) 中等教育学校

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・ 5分程度のペアワークから始まり、グループワーク、発表型授業、マイクロスケール実験の導入、合科目授業の実施など、今後につながる取り組みを展開した。
- ・ 基本姿勢(発表者の過去を見て聞く、発表後は拍手をする、大きな声など)を確立した。
- ・ HRスピーチ、学年集会、学校行事との連携を開始した。

② キャリア教育の充実

- ・ 中等6か年の基本的な枠組みに沿って、全てを実施した。
- ・ 学園キャリア教育推進チームの会合を定例化した。
- ・ 第1回運動会は、前期課程3年のPBL型合同行事として、生徒会が中心となって、企画、運営し成功させた。
- ・ 3年対象の「職場訪問・研修」は、事前学習・訪問・まとめ・発表の流れを確立した。
- ・ 後期課程生徒会が企画・運営・主催をする初のイベントとしてJSBN(日本学生社会人ネットワーク)との共催による「未来構想プロジェクト」を実施し、企画を練り上げる有意義な経験をした。
- ・ 28年度から実施する3年と5年の研修旅行について決定し、準備を開始した。

③ 個別学習支援システムの開始

- ・ 卒業生チューターによる支援開始

毎週土曜日の放課後に、卒業生数名に来てもらい、その週に行ったeチェックの不合格者に対して指導してもらい、理解不足の生徒の底上げになった。

- ・ 各学年での英語、数学を中心にしたHR小テストの実施
放課後に、学習不足の者に対する指導を行った。

④ ICT教育の充実

- ・ 1年全員にiPadを持たせて、授業やHRで活用させた。
- ・ 授業では「ロイロノート」や「パワーポイント」を活用し、HR・学級運営では「クラッシー」、朝学習では「eトレ」を利用したほか、折に触れて情操教育も実施した。
- ・ 授業や朝学習で、電子黒板を利用した。
- ・ 従前の授業に比べ、生徒の取り組みが積極的になった。
- ・ 「クラッシー」では、長期研修中でも個々の生徒とのやり取りが実現した。

⑤ サイエンス教育の充実

- ・ 科学に対する興味を持たせる企画として「風船ロケットの制作」を、中学校男子部女子部中等前期を対象に実施した。
- ・ 中等5年次の春から1年間、桐蔭横浜大学の研究室に入り、学部生や院生と一緒に実験、学習を行う計画に着手した。
- ・ 中等1年を対象に「プチトマトの糖度実験」「大気圧実験」などの理科特別実験講座を開催した。

⑥ グローバル教育の充実

- ・ 開校以来、在学中に英検2級以上取得を目標とし、期を追うごとに率は上昇していたが、27年度は振るわなかった。
- ・ TOEIC、GTECの校内受験を実施し、一般生、帰国生ともに「聞く、話す、読む、書く」の4技能を育成する指導を実施した。
- ・ 「ブリティッシュヒルズ」、「カナダ語学研修」、「アメリカ短期・長期留学」等の各種語学研修を実施した。
- ・ 英語村で1年の授業や語学研修事前講座、集中講座を実施した。
- ・ 模擬国連部が前期課程生徒（希望者）を対象に「グローバルプログラム」を実施した。

⑦ 芸術・文化教育の充実

- ・ 文化センターの企画によるホール行事・アカデミウム展示
学園内で一流芸術を鑑賞できる恵まれた環境を最大限に活用することができた。

⑧ 保護者の皆様との連携

- ・ 全学年では、父母会、クラス懇談会、保護者授業参加、個人面談を実施した

ほか、学年情報WEB、学年だよりで情報を発信した。また、該当学年において、学年懇談会、保護者の集い、家庭訪問、卒業を祝う会、三者面談を行うなど、保護者との緊密な連携を図った。

イ 進学実績

(ア) 東大 4名 (在籍比2.5%)

(イ) 難関大 45名 (在籍比28.0%)

(ウ) 国公立大+早慶+ICU 62名 (在籍比38.5%)

(エ) GMARCH以上 86名 (在籍比53.4%)

ウ その他

模擬国連部は、模擬国連会議全米大会で優秀賞を獲得した。軟式野球部は、関東近県中学生選抜野球大会で優勝した。数学甲子園2015で1チームが第4位となった。日本数学オリンピックでは1名が本選を通過した。

(3) 中学校男子部

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・今年度から全教科に導入し、AL推進委員を中心とした研修を進めることで、1年ぐらいかかる予想をはるかに上回るペースで、5月段階（前期中間）で学習形態としてのアクティブラーニングが一定の水準に達した。前期では推進委員同士で授業参観を行い、授業内容の共有をした。後期では学力三要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性）を意識した授業展開を行った。
- ・iPadを利用した発表では、発表者の立ち振舞いや声の大きさ、内容が大きくレベルアップした。

② キャリア教育の充実

- ・年間の学校行事・学年行事のほとんどがキャリア教育と結び付いており、生徒は、各行事が、どのように「様々なキャリアを知る」「他者と協働する」ことに結び付いているかについて学んだ。
- ・様々な行事を精査し、桐蔭学園としてキャリア教育に一つの方向性を示すとともに、各学年の運営にある程度の自由を認めていく弾力的な教育プランを組み立てた。

③ 個別学習支援システムの開始

- ・新中学1年全員にiPadを配付し、教育開発のeトレ及びクラッシーを導入して、個別学習支援を実施してきた。生徒にPDCAサイクルを身に付させるために、定期考査ごとに学習計画表を作成させ、考査後は次の学習に向けて面談を実施した。
- ・eチェックでの成績不振者に対する卒業生による補習（eフォロー）に前向きに取り組んでいる参加生徒の成績が向上しているほか、卒業生に教えてもらおうと自発的にeフォローに参加する生徒も出てくるなど、学習意欲の向上が図られた。

④ ICT教育の充実

- ・ 中1学年の全教室で電子黒板を利用した授業を展開できるようにしたほか、夏期研修期間には、利便性向上のために無線LANを設置した。
- ・ AL型授業の一環として、一人一台のタブレット端末導入の運用を始めるとともに、授業で利用する補助ソフトとして「ロイロノート」を導入するなど、ICT機器を利用した教育を開始した。

⑤ サイエンス教育の充実

- ・ 新中学1年を対象に、サイエンスに対する興味関心を育成するためのイベントを企画し、「ネイチャーゲーム in TOIN」と題する生物観察やブーメランや風船ロケットの制作のほか、希望者対象の「やさしい科学技術セミナー in 東京大学」を開催し、生徒から好評を博した。

⑥ グローバル教育の充実

- ・ グローバル化の時代を念頭に、英語力を育成するため、桐蔭英語村での英会話授業や夏・春の研修期間中における集中講座をはじめ、福島県にある体験型英語研修施設ブリティッシュヒルズの研修、シンガポール語学研修に参加したほか、グローバルプログラムとして開始された「グローバルフードフェア」に参加し、異文化への関心を高めた。
- ・ 実践的な英語教育として、AL型で4技能（聞く、読む、話す、書く）のバランスが取れた授業を展開した。

⑦ 芸術・文化教育の充実

- ・ ホール行事については、中1では、鑑賞マナーやポイントを記したプリントを配布し、事前レクチャーを行い、東京吹奏楽団の演奏を、中2・中3の東京混声合唱団の演奏では、出演者と一緒に合唱をするプログラムを設けたほか、3学年で和太鼓「彩」を鑑賞した。
- ・ ホール・プログラムは生徒の集中力などを考慮し、一つの演目は余り長くないもの、親しみある楽曲を多く盛り込んだもの、プログラム全体の長さは90分、という内容で実施し、生徒が飽きないで参加できるように工夫した。その他、合唱コンクール、アカデミウムでの芸術作品鑑賞、書道展への参加等を行った。

⑧ 保護者の皆様との連携

- ・ 6月・11月には父母会、各クラスでは年に1～2回のクラス懇親会を実施した。
- ・ 1年生については、夏期研修期間を中心に家庭訪問を行った。
- ・ 生徒・保護者対象に生活習慣改善プロジェクト講演会では、文武両道を実現するための8カ条を、具体的な事例やデータや身近な話題を挙げながらの講演で好評を博した。運動会、鵬翔祭、学園体育祭、合唱コンクールなど、各期の行事に保護者への参加を呼びかけ、多くの保護者が参加した。

イ その他

サッカー部は全国大会でベスト8、ラグビー部は東日本中学校大会でベスト8、硬式テニス部は全国私立中学選手権団体7・8位、軟式野球部は関東近県中学選抜大会で優勝した。

(4) 中学校・高等学校女子部

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・ 従来の講義形式の授業に、生徒が学習した知識を能動的に活用する手法を取り入れた授業を中学1年・高校1年を推進学年として中心的に展開した。
- ・ 他学年でも導入できる部分は、積極的に取り入れ、新しい大学入試に対応する思考力・表現力を育成するとともに、大学で、更に社会に出てからも力強く活躍できる人材育成の第一歩を踏み出した。

② キャリア教育の充実

- ・ 授業の中だけでは学べないこともあり、卒業生や保護者の方々に協力をいただき、フロンティアセミナーを開催したり、職業インタビューを実施した。
- ・ 「メディカルサポートプログラム」は、医学部進学を目指す生徒を対象に、卒業生医師の協力の下、最新医療の講話や医学実習を体験できる機会を作った。
- ・ 探究活動の一つとして、企業(伊勢丹三越・大塚製薬・キッコーマン・読売新聞)とのコラボレーションも始まり、外部機関との関係も構築できた。

③ 個別学習支援システムの開始

- ・ 中学1年には、卒業生をチューターとしてのeフォローをスタートした。
- ・ 図書室の開室時間を、定期考査1週間前と考査中には朝7時としたり、早朝学習できる教室を提供したり、とにかく落ち着いて学習できる場所の確保を指導した。

④ ICT教育の充実

- ・ 中学1・2年の全教室に電子黒板、高校1年の全教室にプロジェクターとスクリーンを配備したことにより、当該機器を使用してのICT教育を開始した。
- ・ 更に中学1年には1人1台のタブレット端末(iPad)を貸与し、授業などで活用した。
- ・ 生徒たちがインターネット利用時に守るべきマナーや危険性について理解を深められるよう、ICTリテラシー教育も行った。

⑤ サイエンス教育の充実

- ・ サイエンスへの興味や関心が高まるよう、サイエンスプログラムや大学教授による講演会を実施した。また、大学や研究機関・博物館などの見学会を企画した。

⑥ グローバル教育の充実

- ・ 英語力向上、異文化体験、英語学習への意欲喚起を目的とした10日間の海外語学研修を中学3年と高校1年で実施した。
- ・ 夏期研修期間には中学3年対象でカナダへ、希望者32名が参加した。春期研修期間には高校1年対象でニュージーランドへ、希望者22名が参加した。参加者は、ホームステイ、語学学校での英語学習の研修、その仕上げとして英語プレゼンテーションを課し、事前学習(レポート提出、留学生との意見交換、プレゼン練習、英語村での英会話講習など)も半年間に及んだ。準備段階から真剣に取り組み、困難を乗り越えて最後までやり抜く強い意志を養うことができ、

目的以上に多くのことを学ばせることができた。

- ・ 春期研修期間には中学2年対象で福島県にある体験型英語研修施設ブリティッシュヒルズへ、希望者52名が参加した。単なる英語研修だけでなく、新たな発見・自信・交流を作り出した。

⑦ 芸術・文化教育の充実

- ・ ホール行事(音楽・演劇・映画)を鑑賞させ、多くの感動を体験することで、感性を育むことができた。最近では鑑賞しているだけでなく、プロの方と一緒に歌ったり、一緒に演奏したりするプログラムも増えている。
- ・ 各種展覧会の芸術作品を鑑賞させることや生徒の作品を展示することで、自己の能力や個性を豊かに育み、感性を磨いた。

⑧ 保護者の皆様との連携

- ・ 中1～中3の保護者対象に吉田校医による講演会を企画した。思春期の子どもたちが健やかに成長することについて、共に考える機会となった。

イ 進学実績

【理数コース】

- (ア) 東大 0名
- (イ) 難関大 27名 (在籍比16.7%)
- (ウ) 国公立大+早慶+ICU 37名 (在籍比22.8%)
- (エ) GMARCH以上 94名 (在籍比58.0%)

【普通コース】

- (ア) GMARCH以上 43名 (在籍比26.7%)

ウ その他

柔道部は、全国高校総合体育大会において団体第3位、全日本カデ体重別選手権において48kg級の仲田奈央(高校2年)が第2位、全日本選抜体重別選手権において63kg級の嶺井美穂(高校3年)が第3位となった。また、剣道部は、全国高校総合体育大会において団体第2位、和歌山国民体育大会においては、本校単独チームとして出場を獲得し第5位となった。

(5) 小学部・幼稚部

(小学部)

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・ 中学・高校での導入・実践を参考にしながら、学園一貫教育の中でスムーズに繋がるように小学部の教科カリキュラムを精査し、“考える授業”を目指した“アクティブラーニング型授業”の導入と実践を図った。
- ・ 平成29年度関東地区私立小学校教員研修会(会場校:桐蔭学園)に向けて、平成28年度の実践を充実させるために、溝上慎一教授によるAL研修会を実施した。(平成28年3月24日)

② キャリア教育の充実

- ・ 総合的な学習のカリキュラムに沿って、児童が自分の将来を考え、目標を立てて努力する機会をもつように、指導内容の精選・充実を図った。

- ・ 偉人・各界で努力して成果を挙げた人等をテーマとして取り上げさせ、資料を作成させながら学習させた。
- ③ 個別学習支援システムの充実
- ・ 3年以上で学習計画表を使った家庭学習の自己管理に向けた指導を行った。
 - ・ 中学年までは保護者と個別相談の下、基礎学力に不安がある児童について従来どおり個別指導を随時実施した。高学年では放課後の自習学習室を設定し、学習監督教員と教科指導教員を計画的に配置して指導に当たった。
- ④ ICT教育の充実
- ・ 普通教室全室に電子黒板を設置し、これを十分に活用した授業の実践を全教員で図った。また、特別教室の電子黒板設置の検討を進めた。
 - ・ タブレットを活用した教育活動の実践に向けて、今後の計画・準備についての検討を開始した。
- ⑤ サイエンス教育の充実
- ・ これまでに充実させてきたハード面と実験・観察のカリキュラムにAL型授業の導入を加えて、“科学的な興味・関心の高い子ども”を育てることに、これまで以上に力を入れた。
- ⑥ グローバル教育の充実
- ・ 実用英検（高学年）への積極的な取り組みを進めるため、学校受検の設定を行い年間2回実施した。
 - ・ 低学年では、英検J r.の積極的受検を指導した。
- ⑦ 芸術・文化教育の充実
- ・ ホール公演鑑賞については、文化センターと企画内容・時期等を検討して実施した。（演劇2回、音楽3回、映画4回）
 - ・ 音楽・演劇・映画は学年に応じて演目の選定を行い、公演内容によっては全学年合同、幼小合同、児童参加型等で実施した。特に、9月の東京バレエ団公演「眠れる森の美女」では全学年児童から参加希望者を募り、オーディション・練習を経て12名が子役として出演参加し、客席の児童全員が本物のバレエを鑑賞することができた。
 - ・ アカデミウムで開催された展覧会を全学年児童に見学・鑑賞させ、子どもの感性を育むようにした。
 - ・ 音楽教育では“音楽の生活化”に一層重点を置き、全学年児童で歌う歌を月毎に設定して朝会等で実践を行った。一年間の集大成である「6年生送別音楽会」では、従来の合奏分野に加えて合唱分野での活動の幅を広げた。
 - ・ 図工教育では、春の幼小合同行事である「造形遊びの日」の内容充実を図り、伸び伸びと活動しながら豊かな感性を育むように指導した。秋には「校内写生会」を実施し、絵画分野を充実させる活動を行った。
- ⑧ 保護者の皆様との連携
- ・ 1・2年生を対象としたアフタースクールを開始し、保護者のニーズに応えた安全で安心な教育環境を整えるとともに、通常の学校生活以外でも人間関係を構築できるようにした。（対象学年は年次計画で上げていく予定で検討中。）

- ・ 全学級に副担任を配置して、その立場と業務内容を確立させることにより、児童指導の充実と保護者との連絡や情報交換が緊密なものとなるように努めた。
- ・ 毎日の連絡帳・電話連絡（随時）・個人面談（定期・随時）等への丁寧な対応を心がけさせ、保護者からの意見を学校として受けとめて対応するように心がけた。（部長・教頭・主任への報告を徹底するように指示）
- ・ 父母会活動において、役員・代議員との情報交換をさらに密にするようにした。
- ・ 学園相談室の臨床心理士によるカウンセリングを紹介し、希望があれば活用した。

イ その他

① コンクール入選・入賞

- ・ 平成27年度「神奈川県夏のすいせん図書読書感想文コンクール」で3名（2年2名，4年1名）が入選した。このうち、低学年・中学年の2部門で最優秀賞を受賞した。
- ・ ロボットクラブ（小6児童と中学生の合同チーム）が東日本ブロック予選を通過し、全国大会に出場（11年連続）した。

② 教員研修と教育活動の充実

- ・ 学園一貫教育の基礎としての学習・生活両面での向上と改善を進めた。
- ・ 校内外での研修会に積極的に参加し、授業力・指導力の向上を図った。神奈川県私立小学校教員研修会（春・秋）には全員参加とした。
- ・ 学年主任・担任・副担任の教員配置により、学年・学級経営と児童指導における教員相互理解を深めることを図った。（特に若手教員の研修と指導）
- ・ 幼稚部と小学部低学年との一貫教育連携をより深くするために幼低部会を定期的に実施し、情報交換と教育方針の確認を行った。

③ 広報活動の強化と小学部入試日程

- ・ 校内外の学校説明会において、学園の新しい一貫教育の特長を強くPRした。
- ・ オープンスクール実施2年目として、その内容充実を図った。
- ・ 幼児教室主催の模擬試験会場として、小学部校舎を2回提供した。（説明会実施）
- ・ 入試（第1・2回）日程を検討してWEB出願方式を導入し、11月までに実施した。受験者・入学者ともにほぼ前年度並みの結果であった。
- ・ 昨年度後半からの柿生駅バスロータリーへのスクールバス乗り入れを継続実施し、児童の安全管理と近隣住民への配慮を行った。

(幼稚部)

ア 重点事業

① アクティブラーニング型授業の導入

- ・ 中学・高校での導入・実践を参考にしながら、学園一貫教育（小学部）の“考える授業”“アクティブラーニング型授業”に繋がるように幼稚部カリキュラムの精査・検討を行った。
- ・ 3年保育の開始に向けて、幼稚部3年間の保育カリキュラムの精査・検討・作

成を行った。

- ・ 小学部教員による幼稚部特別体験授業（図工科・音楽科）を実施することにより、一貫教育の楽しさと小学校への期待感を園児が体感できるようにし、その良さを保護者に伝えた。
- ・ 幼小一貫教育部を中心として、小学部内部進学を前提とした一貫カリキュラム（生活面・学習面）を確立し、「学ぶ姿勢」と「自分でできる力」を身に付けさせることを図った。

② キャリア教育の充実

- ・ 幼稚部内や小学部児童との異学年交流を盛んにしたり、野球教室等の催し物の機会を設定したりして、園児が自分の将来の姿を想像できる環境を整えるようにした。

③ 個別学習支援システムの開始

- ・ 「かず」「ことば」の学習や制作活動において個別支援が必要な場合には、学級補助職員が対応した。

④ ICT教育の充実

- ・ 電子黒板の保育室設置と電子絵本の導入を検討した。

⑤ サイエンス教育の充実

- ・ 小学部の理科教育と連携をとりながら、植物や野菜の栽培・観察の指導を行った。

⑥ グローバル教育の充実

- ・ 従来からの年長組における英語教育を継続しながら、次年度における年中・年少組での英語教育を検討した。（28年度は年中からの導入で開始。年少組については状況を確認しながら検討する予定）

⑦ 芸術・文化教育の充実

- ・ ホール公演鑑賞については文化センターと企画内容・時期等を検討して実施した。（演劇2回、音楽2回、映画2回）
- ・ 音楽・演劇・映画は学年に応じて演目の選定を行い、内容によっては幼小合同や遊戯室での公演も実施した。
- ・ アカデミウムで開催された展覧会を全園児に見学・鑑賞させ、子どもの感性を育むようにした。
- ・ 定期的に音楽朝会を行い、“音楽の生活化”の実践により、音楽がより身近なものになるようにした。また、一年間の集大成である「学芸会（ひなまつり会を改称）」は、小学部ハーモニーホールで発表した。
- ・ 図工教育では、春の幼小合同行事である「造形遊びの日」の内容充実を図り、小学部図工科と連携して、園児が伸び伸びと活動しながら豊かな感性を育むように指導した。

⑧ 保護者の皆様との連携

- ・ アフタースクールを開始し、保護者のニーズに応えた安全で安心な教育環境を整えるとともに、通常の学校生活以外でも人間関係を構築できるようにした。
- ・ 毎日の連絡帳・電話連絡（随時）・個人面談（定期・随時）等への丁寧な対

応を心がけさせ、保護者からの意見を学校として受けとめて対応するように心がけた。(部長・教頭・主任への報告を徹底するように指示)

- ・ 父母会活動において役員・代議員との情報交換をさらに密にするようにした。
- ・ 学園相談室の臨床心理士によるカウンセリングを紹介し、希望があれば活用した。

イ その他

① 保育環境の整備

- ・ 地域療育センターあおば（ソーシャルワーカー）による巡回相談（年2回）を利用して園児の様子を観察してもらい、その後の保育に活かした。
- ・ 年長（後期）における到達度試験において、一貫教育カリキュラムに準じた実施時期の適正化を検討して1月に実施した。
- ・ 学園における初等教育の充実を目指して、幼稚部の3年保育（平成28年度入園募集）を行った。

4 各部門

(1) 情報ネットワーク部

ア ICT機器（iPad）の導入

中学1年男女、中等1年の生徒、及び学年所属教員ならびにその授業担当者にiPadを貸与した。授業で活用するため、授業支援システムとして「ロイロノートスクール」、校務支援システムとして「クラッシー」、個別学習支援システムとして「e-トレ」を導入して、活用した。その活用のための研修を必要に応じて実施した。

イ 無線LAN環境の整備

各教室にプロジェクターとスクリーンを設置したほか、中学2年男女、中等2年のホームルーム教室に無線アクセスポイントを設置した。また、iPadを生徒が1人1台活用していく上で、安定した無線環境を整備するために、中学男女、中等前期課程の教室回線と業務用回線（高校男女、中等後期の校舎と大学を含む）を切り分け、ネット回線を利用した授業がスムーズに行えるようにした。

ウ 教職員使用パソコンの更新

中学・高校・中等教育学校の教職員貸与パソコンについては、現在貸与している旧式パソコン（6年以上経過）と故障機、ならびに現在個人パソコンを使用している教職員で貸与を希望している機器の更新をした。

エ 情報配信システムの充実

学園情報WEBを更に活用できるようにしたほか、補助を求める保護者に対して、メールや電話に手対応し、学校からの情報配信を受信できるようにサポートした。

オ 教員のITリテラシーの向上

ICT教育委員会を発足し、ICT機器の導入と活用について定期的に会議を行った。

(2) 一貫教育推進部

「アジェンダ8」の策定および推進を行った。特に、その中心となるアクティ

ブラーニングについては、溝上慎一教育顧問と連携を図り、アクティブラーニング推進委員の組織化、学内への浸透、学外への発信に取り組んだ。

情報発信については、各種メディア対応を行い、学園の情報を外部発信した。また、学園報を月1回のペースで発行した。

(3) 入試対策部・入試広報部

優秀な児童・生徒を多数確保することを目指し、また本校をよりよく理解し、入学してもらえるように、5月から翌年1月にかけて様々な事業を積極的に展開した。

ア 中学中等入試

恒例(4回目)となりつつあるオープンスクールを5月に開催し、講座内容も充実させ大変好評を得た。また、予約制説明会を男女各4回ずつ、秋に学校説明会、入試体験会を、年明けに6年生対象の説明会を開催するなどして、合わせて2,595名の受験生・保護者が参加した。塾訪問も担当者の人数や訪問校および回数を増やし、塾への本校理解を積極的に図った。

イ 高校入試

秋に入試説明会を2回、学校説明会を1回、共に授業見学を伴って実施し、延べ4,015名の参加を得た。また、公立中学校への進路訪問も474校と大幅に増やし、本校の入試方式変更への理解を図った。

ウ 個別学校案内

小学生・中学生・保護者を対象に本校の教育方針・内容、そして何より直接施設設備を見てもらえ、その効果は大きく172件(内帰国生62件)実施し理解を深めた。

エ その他

アカデミウムで開催される展覧会・展示会等への周知・紹介の案内については、これまでの青葉区内の小・中学校から、区以外の近隣校にも拡大し、本校の教育活動の一環である芸術・文化教育の取り組みをより広くに知らせた。

(4) 健康管理センター

ア 健康管理の徹底

4月に児童・生徒・学生及び教職員の定期健康診断を実施した。児童・生徒・学生に関して、健康診断結果からの有所見者に対して運動制限などの指示を行ったほか、授業担当者への的確な連絡を行った。また、26年度から中学男女・中等教育学校の一斉健康診断(25年度までは3日間で実施)を実施したことにより、生徒への授業への影響を軽減できた。

イ 行事に伴う救護体制の確立

各学校で実施している校外宿泊研修・サマーキャンプ・ウインターキャンプ・学園体育祭に際して、協力医師・派遣看護師の手配のほか、持参医薬品の準備等を行った。当日は現地に帯同し、協力医師のサポート、救護係の教員と協力して怪我人・病人の応急処置・看病に当たった。

ウ インフルエンザ等への対応

インフルエンザ等の流行時、発症状況の集計を行った。また、学級・学年閉鎖

が出た場合は、保健所等への連絡を行うとともに、予防の啓蒙を行った。

エ 学園相談室の準備

重点事業⑧の「保護者の皆様との連携」の一つとして「学園相談室」設置の準備に当たった。具体的には、常駐の臨床心理士を置き、今まで以上に現場と密着した心理面でのサポートができるようにした。

(5) 文化センター

桐蔭学園が目指している知育・体育・徳育の三位一体教育の一翼を担う情操教育をサポートすることを目的として、桐蔭学園シンフォニーホールにおける文化公演と、桐蔭学園アカデミウムにおける展示会の企画・運営・開催をした。また、アクティブラーニングの一環として生徒参加型の演目（主に音楽鑑賞会）も積極的に取り入れるよう努めた。

シンフォニーホールにおいては、計44回の文化・芸能鑑賞会を実施（内訳：音楽鑑賞会16回、演劇鑑賞会12回、古典芸能鑑賞会2回、映画鑑賞会14回）し、対象学年別に全児童・生徒が6回以上の公演を鑑賞した。在校生の保護者と卒業生で構成される「シンフォニーホール友の会」も会員数1,623名(年度初めは1,663名)と若干名の減少は見られたが、年間の鑑賞対象公演は29演目、総鑑賞者数は約5,000名に上った。また、青葉区広報課と連携し、区民招待公演を4回実施し、各公演20名、計80名を抽選で招待し、好評を博した。

アカデミウムにおいては、芸術作品鑑賞会・学習体験展示会を3回開催した。学習体験展示会においては「南極・北極」をテーマにした展示を行い、実際に南極まで出かけた本校教諭と連携を取り、クイズコーナーや体験コーナーを多く設け児童・生徒が積極的に関わることのできる展示方法を取り入れた。年間を通じての来場者は15,585名を数えた。

(6) 社会生活指導部

ア 避難訓練の実施

危機管理対策の一環として、災害発生時に児童、生徒等が常に安全に行動できるように、春（4月）と秋（10月）の年2回、避難訓練を実施し防災意識の向上に努めた。特に、春においては、幼・小・中・高・中等・大学も含め、全学一斉の避難訓練を同時間帯に実施した。

イ 交通安全教室等の実施

新年度における新たな自転車通学者（自宅から最寄り駅までの自転車利用者及び自宅から学校への自転車通学者）全てをシンフォニーホールに集め、青葉警察署交通課課員による講演と映像での道路交通法遵守の指導を行う、交通安全教室を実施した。また、年間を通じて計画的に生活指導部の教員が、校外でのヘルメット着用、一時停止義務の履行指導を実施するなど、自転車で安全に道路を通行するために必要な技能・知識を身に付けさせる指導を実施した。

ウ 落語の会ボランティア生徒の指導

例年11月中旬に、シンフォニーホールにプロの落語家を招いて実施する「落語の会」に近隣の介護施設から高齢者の方を招待し、公募したボランティア生徒がこれら招待者を介助しながら、一緒に落語を鑑賞している。その際に、ボラン

ティアの生徒は、介護施設の方による高齢者の介助の仕方、車イスの扱いについての事前オリエンテーション指導と介助の体験活動を通じて他人を思いやる心など豊かな人間性を育んだ。

(7) グローバル教育センター

「多様性を受容できる人材の育成」という見地から、教育活動を展開した。内容として、食堂部と連携したフードフェアや、社会に通用する英語力を育成する目的の特別講習、中1からの特別プログラムの展開などをした。また、校外団体との連携や、留学生の一般授業への積極的な参加も促進した。

第3 財務の概要

(1) 連続資金収支計算書（経年比較）

学校法人 桐蔭学園

★H27年度学校法人会計基準改正による

資金収支計算書

(単位:千円)

(単位:千円)

科 目		H24年度	H25年度	H26年度
収入部	学生生徒等納付金収入	8,816,973	8,399,918	8,120,711
	手数料収入	173,158	166,328	170,849
	寄附金収入	228,905	303,448	269,448
	補助金収入	1,692,087	1,679,569	1,603,206
	資産運用収入	15,667	15,938	13,856
	資産売却収入	0	10	1,285,881
	事業収入	179,714	184,233	201,299
	雑収入	482,590	471,054	226,571
	借入金等収入	119,160	606,920	486,120
	前受金収入	1,989,192	1,926,466	1,933,367
	その他の収入	311,136	418,376	452,761
	資金収入調整勘定	△ 2,447,096	△ 2,419,807	△ 2,129,286
	前年度繰越支払資金	6,262,404	5,956,144	5,438,028
合 計	17,823,890	17,708,597	18,072,811	
支出部	人件費支出	7,965,603	7,873,480	7,559,498
	教育研究経費支出	2,005,544	2,106,803	1,971,802
	管理経費支出	486,307	497,680	516,829
	借入金等利息支出	104,976	69,733	55,829
	借入金等返済支出	1,120,840	1,082,020	1,064,360
	施設関係支出	42,727	588,900	778,255
	設備関係支出	174,924	189,313	263,486
	資産運用支出	0	0	0
	その他の支出	809,194	841,089	981,642
	資金支出調整勘定	△ 842,369	△ 978,449	△ 664,511
	次年度繰越支払資金	5,956,144	5,438,028	5,545,621
合 計	17,823,890	17,708,597	18,072,811	

科 目		H27年度
収入部	学生生徒等納付金収入	7,941,821
	手数料収入	155,231
	寄附金収入	256,021
	補助金収入	1,584,174
	資産売却収入	205,000
	付随事業・収益事業収入	169,112
	受取利息・配当金収入	1,132
	雑収入	279,004
	借入金等収入	2,000,530
	前受金収入	1,801,620
	その他の収入	206,402
	資金収入調整勘定	△ 2,189,518
	前年度繰越支払資金	5,545,621
合 計	17,956,150	
支出部	人件費支出	7,514,643
	教育研究経費支出	1,844,735
	管理経費支出	471,733
	借入金等利息支出	53,883
	借入金等返済支出	840,510
	施設関係支出	1,540,313
	設備関係支出	150,258
	資産運用支出	0
	その他の支出	734,600
	資金支出調整勘定	△ 680,427
	翌年度繰越支払資金	5,485,902
合 計	17,956,150	

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。

(2) 連続消費収支計算書 (経年比較)

学校法人 桐蔭学園

★H27年度学校法人会計基準改正による

事業活動収支計算書

(単位:千円)

科 目		H24年度	H25年度	H26年度
消費 収 入 の 部	学生生徒等納付金	8,816,973	8,399,918	8,120,711
	手数料	173,158	166,328	170,849
	寄附金	246,971	324,325	292,253
	補助金	1,692,087	1,679,569	1,603,206
	資産運用収入	15,667	15,938	13,856
	事業収入	182,477	178,542	205,421
	雑収入	497,681	486,582	241,464
	帰属収入合計	11,625,014	11,251,202	10,647,760
	基本金組入額合計	△ 1,020,854	△ 1,158,941	△ 1,433,864
	消費収入合計	10,604,160	10,092,261	9,213,896
消費 支 出 の 部	人件費	7,894,344	7,903,387	7,639,377
	教育研究経費	3,434,857	3,527,788	3,309,557
	管理経費	657,789	663,743	681,616
	借入金等利息	104,976	69,733	55,829
	資産処分差額	206,745	122,249	393,337
消費支出合計	12,298,711	12,286,900	12,079,716	
当年度消費収入超過額	△ 1,694,551	△ 2,194,639	△ 2,865,820	
前年度繰越消費収入超過額	△ 24,038,032	△ 23,814,113	△ 25,564,559	
基本金取崩額	1,918,470	444,193	1,099,958	
翌年度繰越消費収入超過額	△ 23,814,113	△ 25,564,559	△ 27,330,421	

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。

(単位:千円)

科 目		H27年度	
教育 活 動 収 入 の 部	学生生徒等納付金	7,941,821	
	手数料	155,231	
	寄付金	184,988	
	経常費等補助金	1,561,437	
	付随事業収入	165,145	
	雑収入	297,491	
	教育活動収入計	10,306,114	
	事業 活 動 支 出 の 部	人件費	7,596,061
	教育研究経費	3,131,850	
	管理経費	631,852	
徴収不能額等	0		
教育活動支出計	11,359,763		
教育活動収支差額	△ 1,053,650		
教育 活 動 外 収 支	事業 活 動 収 入 の 部	受取利息・配当金	1,132
	その他の教育活動外収入	0	
	教育活動外収入計	1,132	
	事業 活 動 支 出 の 部	借入金等利息	53,883
	その他の教育活動外支出	0	
教育活動外支出計	53,883		
教育活動外収支差額	△ 52,751		
経常収支差額	△ 1,106,401		
特 別 収 支	事業 活 動 収 入 の 部	資産売却差額	0
	その他の特別収入	120,874	
	特別収入計	120,874	
	事業 活 動 支 出 の 部	資産処分差額	46,679
	その他の特別支出	0	
特別支出計	46,679		
特別収支差額	74,195		
基本金組入前当年度収支差額	△ 1,032,206		
基本金組入額合計	△ 802,441		
当年度収支差額	△ 1,834,647		
前年度繰越収支差額	△ 27,330,421		
基本金取崩額	50,954		
翌年度繰越収支差額	△ 29,114,115		

(参考)

事業活動収入計	10,428,119
事業活動支出計	11,460,325

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。

(3) 連続貸借対照表 (経年比較)

学校法人 桐蔭学園

★H27年度学校法人会計基準改正による

貸借対照表

(単位:千円)			
	H24年度	H25年度	H26年度
資産の部			
固定資産	54,324,555	53,411,671	51,293,056
流動資産	6,480,576	6,004,080	5,866,809
資産の部合計	60,805,131	59,415,751	57,159,865
負債の部			
固定負債	5,080,358	4,625,148	4,324,387
流動負債	4,255,377	4,356,904	3,833,736
負債の部合計	9,335,735	8,982,052	8,158,123
基本金の部			
第1号基本金	74,374,619	75,089,368	75,423,273
第4号基本金	908,890	908,890	908,890
基本金の部合計	75,283,509	75,998,258	76,332,163
消費収支差額の部			
翌年度繰越消費支出超過額	23,814,113	25,564,559	27,330,421
消費収支差額の部合計	△ 23,814,113	△ 25,564,559	△ 27,330,421
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	60,805,131	59,415,751	57,159,865

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。

(単位:千円)	
	H27年度
資産の部	
固定資産	51,314,843
流動資産	5,873,663
資産の部合計	57,188,506
負債の部	
固定負債	5,428,683
流動負債	3,790,288
負債の部合計	9,218,970
純資産の部	
基本金	77,083,650
第1号基本金	76,174,760
第2号基本金	0
第3号基本金	0
第4号基本金	908,890
繰越収支差額	△ 29,114,115
純資産の部合計	47,969,535
負債及び純資産の部合計	57,188,506

※千円未満の端数について四捨五入しているため合計などの額が、計算上一致しない場合があります。